觀音經和談鈔圖會

上

觀音經和談鈔圖會序

夫妙法蓮華經ハ三世諸仏出世の
本懐にして五十餘年の樞鍵なり
かゝるが故に仏のいはれし諸經中王なれ
ある事一と申すに此普門品ハ廿八品の
骨髄四要品乃咽喉なりしかるに圓れ
穆王ハ天馬にのりて靈山にいたりまふ

爾時無盡意菩薩即從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言

爾時とハ前年の十六法華のとしめなり二十四品めの
妙音品をとききをはりて今此普門品をときたまふ
その時のをとなり○無盡意とハ東方不眴世
界の普賢如来の補処なる菩薩なり宝山
へきりしのたまふなり○偏袒右肩とハ天竺にてハ貴人の
おまへにてハ右の肩をぬぐを敬ひとせりその因縁ハ
右ハ則をもちふるなり仏事をなすにも右をまさ
とりて仏なり日本にてハ人のおまへにて肩ぬぐをいましむ
るなり又外道ハ左を孔肩子ハ右の肩ぬぐとあり
○無盡意菩薩八万の大衆の中よりすゝみ出て

観音の因縁をとふてまふハ自身ハ無数の聞えるゝみ
きて観音の因縁をきゝきたしを一会の大衆ハ
ことごく観音の由来ときかしめんとの為ニ問のまつ
○佛とハ娑婆の教主千万億諸仏の釈迦如来とさすなり

世尊觀世音菩薩以何因縁名觀世音

此文の無盡意菩薩の釈迦如来へ対し
観世音ハいかなる所得ましますぞと問ふなり想
しくハ名をとふハ都子の心ありともいふ
すして問ことをあり我ハ恵意どもときゝへ発心ね
とふことあり又あらたに問ことありまふおりむ
そぞといふことを知りて此無盡意ハきゝておりむきそ
とひ玉ふ
なり

佛告無盡意菩薩善男子若有無量百千萬億衆生

此文より奥の福徳之利といふ所まで観音の利益を悉くあかし釈迦の無尽意に對して悉くときたまふなり
○善男子とハ志への意ハ観音の利益をうくる深き事を守れしく給ふ名号を唱ふることあるといふも

受諸苦悩

此文の意ハ四苦八苦あらゆる事の苦悩なきハいふなり
及びたとひ業因によりて地獄餓鬼畜生道などにて苦をうくるときも一心に南無観世音と唱へ
あてまつる時ハ苦患をのがるゝなり

信ふ豪家の百姓たり篠山郡ありける山を耕しときに岩を
ほりしがあやしき泉水の内へ大なる魚び踊り一尺ばかり
出ていふそ身動きもせずしてありしを見付不思議におもひそれ
器に入れ水に一夜ばかり内に蛙蝶のすがたもうびとりうんて出
きてさもせずかゝる魚を見つけ其のまゝに
集まる人を絶せまる人とも毎度双分一体の人々まで
ありて人思つくとして衛護みるべし一分死すべし合
て不便なる事なりとて是より衆燃えさる人なまで南無
大慈大悲の観世音菩薩と三度ん名号と一心ならぬ人
ともかくれども互に六寸なり後へ引くるを見て又名号と
とらへしに世りく双分のよ州もろへ八入ぬ事をかゝへくる
又かゝるときに数々林のりに維子を斬とび去らうくろを
在人居合鉄砲をくらうと云る人の旧今日に十八日観
音の縁日なり止める人と見て心やしらしかるに我紅魔に
て明見して日忌る人もせんかたく口のうちにそ一心なり
名号をとなへ名まだ在人ハ物を見るかたくとききれど
物の是非にわかうち鉄砲を庭へいたりかゝる所にすはかる
維子たちわかずしてうつぎなり四つく後ぼし鳥の立まで
ありけるに故よくかゝるを見るにまさに木の根と井らうきところわく
なりてのこさゞる人ハ南無名号を唱へるようにかれが在人へと
発起して此より殺生をやめて念仏信者となりうりしとぞ

観音經圖會巻之上

若有持是観世音菩薩名者設入大火火不能焼由是菩薩威神力故

此文ハ火難とのがるゝ説相なり○設入大火火不能焼とハむかしたとくといへる居士晋の世に天竺より長舒といふ人来りて都に家を作りて住居せりある時近邊に出火ありしに長舒が家ハ風下なれバ更にのがるべき手段なかりしに長舒ハ経を読を[illegible]なく只一心に観世音の名号を唱へ居たりしが不思議や隣家まで焼て既に長舒が軒に火うつらんとせしに忽ち風かはりて火難をのがれけり誠に法力といひつべし[illegible]世に出たるおもむき我[illegible]よ[illegible]

いふざるまゝに火忽ち消うせけり又法智といふ人ある時廣野を行に折から野火にあひて後より焼来りてさらに逃るべきやうなかりしかバ其時一心に観世音を念じありしかバふしぎや法智がりつきし方へ避くる火消滅して身に怪我なく安く通りける是なる観世の火難をのがるゝ相なり太[illegible]の證ぞるべし○さて観解に応くもろ〳〵一切衆生三毒の火宅に住して煩悩の火に焼るゝときこれを[illegible]観音を念じまつれハすみやかにくるしみを出て上品の浄土にいたるべきなりたとへ又悪業によりて八熱の地獄に堕るとも一心に名号をとなへバ猛火たちまちに変じて蓮華の池となるべきとなり

若為大水所漂称其名号即得浅処

此文は水難をのがるゝ謂相なり昔唐土に劉澄といふ人
廬陵といふ國におもむくとき船中にて大風にあひ既に
劉澄が母弟子のあまともに觀音の御名を唱
へまゐらせし風しづまり浪平らかにして忽ち新人の船頭
きたりて船をおして安穏に向ふの岸にぞ着けゝる
舟をあがり後を見まゐらするに今までありて艪櫂をあやつりし船人
の船頭かきけすやうに見えずなりしかば此難風に遭
し船ども一艘として助かるはなかりしに此舟のみ助かりしは
全く船頭と見えしは觀世音にてましますなりと劉澄が
うち出家となりて一生觀世音を念じ奉りける又道圓といふ人
孟津といふ浦を三人づれにて通るに氷の上をわたりけるとき氷
くだけて先なりし者は水中に陥入りけるに残りのものも引て流
しに道圓一心に觀世音を念じまゐらせ氷に抜とんで
おくれ難なく岸に着き道圓あまりのありがたさに出家は

よりすがりて一心に觀世音を念じまゐらせばまさしく所拾
菩薩のいたゞきより赤色の光明をはなちたまひ道圓がからだ
を照らしたまへるに忽ち串相の水難といひし現世の
利益の御瑞相なり大慈悲の誓をみてまゐらせ觀
音にやくすがりて串相のことは是を見るらん只一と
んの難儀なり煩惱のみなもとより生死の大海に
沈まんを難儀の中の難儀なりと知りて觀音を念じ
たてまつらば必ず生死の大海をわたり涅槃の岸に到るべく
昔長門肥前の兩荒業の小兵衛といふ海上の職人あり
其の初め備後といふ所より二人乗の舟にて此灘に
出るに思ひもよらず風かはり浪つよくして雲もなく此あたり
忽ち雲おこりて海上になりたる所もなまじひにかくしても
底に沈まんとするにも岐わかくして三舟かくきを新たにうつ男
また人ゆくへしらずして船底にまくらまで二人の者も見南しくこの
者の右衛門と常に手すりつてたゞく乾けば命をとなりわづかり
身をつぎまゐらせて次第々々に沖のかたへ流されけるに
きが三人の者どもは方々分けて命もあやうく見えけるに中に

祖父江吉刀

若有百千萬億衆生爲求金銀瑠璃硨磲碼

碯珊瑚琥珀真珠等寳入於大海假使黒風吹其船舫飄墮羅刹鬼國其中若有乃至一人稱観世音菩薩名者是諸人等皆得解脱羅刹之難以是因縁名観世音

色白し〇硨磲は天竺の玉石なり其色しろく白し
〇瑪瑙は其色赤く白き石あり馬の脳にゝたる
又人に瑪瑙といふ丹丘の野に鬼おれし血化して馬瑙と
なるともいへり〇珊瑚ハもろこし大秦の西南七百里
おどろく珊瑚樹といふ玉の海底れんのうてに生
ずる木なり枝あまた有て葉なしおほきなるは丈六
しやくゆきには三四尺あり色あかくしめにあかく後
に黄色あり次は赤し其の網とそちてそれをとる也
〇琥珀ハ其色赤黒にして輝けり松の脂地に入
て千年にして化して茯苓となり茯苓又千年
して化して琥珀となる八九尺を地の下にありその
うへに草木生ざるなり〇真珠宝玉ハ大
海といへるを求めんために龍宮に入につけて智者
大臣の乃至に海七ツの珍宝あり百二十の

宝ありて釈しまつり何宝は殊種にあらず真珠を
もとめんために龍宮に入て真珠宝玉といふ
経文のごとし〇羅刹鬼国とは蒙古
外国に百余人舶子国より海に浮んで扶桑国
の南にむかふ忽ち悪風におふて鬼国にたゞよひ
まづくろうんと手船中の諸人おそれて観音
と念ずる中に一人の沙門あり観音を念ぜざる孫
名せざる忽ち悪鬼沙門とらへんとす沙門あふて
観音と唱ふるときに羅刹解脱をゆるなり其の
縁ありきまつりハ現世の難を遁れ従ふて倚かり〇
さて観解に底くすりときは煩悩の悪風にまよふ
されて牛頭馬頭阿羅しや羅刹の国におもむくを
いふとも観世音を念ずれば其難とのがるゝ
ものなり

にはかにときたちあらはれきたりて文殊の太刀をふるひく
三度斬るに三度ながら折れくだけぬ是なりとて観
その鹿を思はれば彼者髪のうちより観
音をとり出して見るに刀の跡三ツつき
たり彼者涙をながし我命をたすかりしも彼
観世音の御身代りにたち給ひし霊験なりとて是
より出家なして観世音を信じ奉る○また
ほし年中に高句麗といふ人王命を殺さ
れ流罪にて死刑にあたりしとき観音を念じたりしかば刀
三ツに折れて命たすかりて後是を持ち尊みしかば
我身を重んじて獄を逃れ観音を信じ奉り
太唐の縁にえんより○又武伝記にむかし唐土
ある国に美人の娘ありて此姫二歳
のときに母におくれて継母にそだてられ月日すぐしし

十三になりしが天下無双の美人なり帝王これを愛し
后にたてんとおぼしめしけるに定めける継母此姫
をいたく憎みあるとき父に申けるは姫君は悪しき妻
まことなんと讒の中言もありけると深くまた父様も
かゝる所に継母よその男をそのこて其嫁姫
の閨よりいだしてひそかに是を又につけたり父是を見
て伝へ聞くところなしと下人にいひつけ殺させけるは
奥山につれゆき首を討つべしとつれしが又このことを見て殺て
悼て折節帝王の山へ狩に出御ありしが岩の上をみれ
ば一人美麗の姫一人居たり何者ぞと尋ね給ふに人を
おそれて此山にすて切られしとなげきしかども帝
ふしぎに思ひよしをやすく帝あやしく思ひし
姫を王宮に召つれ給ひて勅使をもつて陛下に
つかはし姫が事を尋させ給へば陛下は姫をおもむくよう

なしとかや○むかし天竺舎利国に五種の鬼病おこり
はやりてこれにかゝれば眼より血をながし耳きこえず
鼻に物の香を嗅がず舌にその味ひをうけず
身にその觸るゝを覚えざる鬼病なりそのころ
月蓋長者といふ人ありその長者に如是女といふ
娘ありこの娘も極の鬼病をなやめり国中の
良医はあらゆるさまざま療治を尽すといへども
しるしなし耆婆大臣の力もおよばずそのとき長
者せんかたなさに釈迦如来の御前にまいりて
と歎きまうしければ仏のをしへにて西方阿弥陀
観音勢至とて一仏二菩薩をおろしまゐらすべきよし
を焼香懺悔して請じたてまつるとき忽ちあらはれ
すなはち声のごとく念ぜしかば極楽世界より
三尊の影向ありて弥陀は光明を

はなちて病人を照し勢至は手を伸べて頂を
なで観音は六字章句の陀羅尼をとなへて病を
加持し給へば忽ち本復せしなりければ
三尊極楽へ帰りたまふを長者歎きとゞまり御
尊形を閻浮檀金にてうつさせ本仏の
弥陀は極楽へかへりまします和国弘の尊像も同
形までおなじく其のまゝ付いづれが本仏いづれが
新仏さらにみわけざりしそのまゝの事なし譲らく
まいらする阿弥陀は今の善光寺如来にてまします勢至
は筑前国安楽寺にましまし仏と観音は尾張
甚目寺の本尊なり末代の今も鬼病のおこる
ときは観音を念じたてまつるべきものなり
○さて観解にやくするところはこれまで衆生あさま
おこるところの貪嗔痴の三どくの煩悩けする

觀音經和談抄圖會 梓元
御書物所

いひ身にあつるを械とらふ。○鎖とハくさりにてつなく撿とハそのからめまに封をはけ志るしをつけることをなり観音を念ずる人ハかゝれども難ものがるゝ○むかし大唐に蓋護といふ人ありしが罪ありてふさがまるところ三日三夜のあひだ観音を念じけれバ則ち観音出現して光をはなち蓋護をてらしたまへバ械もいつしか解て志つかに獄屋の門さへ開る由而悪び出しが道にてしかし四句もさづかりけれ又観音光をはなちて其道をてらしたまへりとあるの類にてあるもあまた則ち一心稱名の利益なり○若有罪若無罪ハ罪ありても罪なかりとも勿論しまさ罪なきに人の讒言にて無實の刑におこなハるゝもあり唐土にも一行阿闍梨玄宗皇帝の命をそむき果羅國へ流されたまひ日中にても冤枉の罪なくして杳幸の府に遷りかつ。○さて観解のこゝろハ杻械枷とハ紂王をもて貪欲に喩あるひハ鎖といふハ煩悩の絆なりさまざまに三毒乃発生ハ纏なくして自から縛られまり妻子眷族といふ和合ある繋につながれて三途にわたるまでは絆といふ三毒に纏れて正路をうしなひ悪道にまよふといふこゝをひとへに観音を念ぜバ仏道にいたるべきことのなり

若三千大千國土滿中怨賊有一商主將諸商人齎持重寶經過險路其中一人作是唱言諸善男子勿得恐怖汝等應當一心稱觀

世音菩薩名号是菩薩能以無畏施於衆生汝等若稱名者於此怨賊當得解脱衆商人聞倶發聲言南無觀世音菩薩稱其名故即得解脱

此文の意は怨賊の難を挽て説相なり。○賊とは
他の物を奪ひとるをいふ。唐土に法道といふ人山居
せしに盗人きたりて衣裳をうばひとりあまつさへ人
を害せんとす。此法道を求て縛り付けて弓を
射て矢をもてころさんとするとき矢弓に立てさて離れず
其の矢をつがふとも又立つさて、此とき盗人
いかなる法道ぞといふに子細ありやと問ふ。法道こたへ
て観音の名号を唱ふるよりほかに子細なしと答ふ
盗人ありがたく思ひ法道が弟子となりて、その後
出家して観音の行者となりけり
むかし都に眼清といふ仏師あり。毘首羯磨にもおとらざる
程の上手なり。此の仏師毎日観音経を三十三返づつよみし
がある時丹波の国の穴太寺の家来といふ人此仏師をよびくだし
て観音を一体作りあたへし。毎日ひまに二十三日の内につくりあげ
ければ其の礼に馬を一疋あたへける。家来思ふやう仏師に
馬をあたへしはをしき事なりと、下人に眼清が帰る
を待伏させ、ひそかに大江山の峠にて眼清を射
ころしつつ、馬をうばひとりけり。家来ねたみて
き疑ひ深き人なりしが、眼清が安否をきかんとて眼清が
宅へ行きしに、はからずも眼清はつつがなく我が家にかへり
仏の如くあたりに居りけり。此の仏師に安置せし
まづ家来のおどろき、仏をとりに国に下りしに
まづ入ると、観音の御首に、矢の立ちて有りけり。又
馬もうせて、家来は懺悔の心をおこし、その
観世音の御身に矢の立ちけるを、仏師のかはりに
受け給ひしとて、家来出家して法名をうけ、居士と
なりけり

穴太觀音
老坂地藏
山城水尾村より峠まで二十二町

丈助へハ母ちろんぢうへも患くしく年へしが月日經るに志たが
ひ親ぢの年とも積りし帝助夫婦も孫々不孝うしく
後々には二人の命を縮めへろりく居ざれども帝助し孝心の老人
丈助ハおのまゝに不孝の體へさし不足とも見ずに唯のろく
主家の病くあまなりざりし年とのく撫きも縮に七十余りにして
帝助死して後年まで老婆もはてのくおくやしひたん病しして
帝助が中風のくらにまさもるくりかりしまよりむすめ夫婦
行年も己がまゝにくろりひたまひゞのうりの人ふ孫り孫とうく
またかのものもなかりしがうぎや老婆死しては二十日めにわらそて
むすめ夫婦へ細作て出て又家すなる男子壱人ありにあそひ居さ
るにいかなるものあおん此家より出火して家財のこらず焼
失せりその折諸の小兒ハ知へしげ出くおどろきしさるを
みく私とうくよろこびわらぞうつきの一つなりさら待り
甚むすめ夫婦ハ行ひとうすりしるのもあらざるに為てみなまくも只
またかれハ往ふ天きを嫌ふとするものもあるがれハ親子二人おもむき
しらぞれ不として出家なしうりてく其後年月を經て白髪の翁
子都より立かへり寺家とお続し是れを為て此我おつく往〻
帝助夫婦も今は無縁となりしと歎きにおもひ是うまゝが墓所とふ
めうに利ち主家の故は坐の拝墓するうりて夢に後ぞしく
縁や世は志がうくる日義は天なしそすろ里人へ二れを
刈除んて年ぐりりにそえとぞ其ろく此墓所掃除せんうす

ゑひもよしずまる旅ハ先年おまり毒壺の生茂かるより里
人も無縁と撫く千盃菜葉草ふ刈くらひしそのかりしが忽ち錢
數しく人年をわらしずいかくそ出せしふ古墓のくうりなり
とうせしめへさまし帝助の塚ふ詮とかしあるひハ記傳し
くせうくふ年をせりてまよりハ誰あつく傳とも治ろのとの
なりしとかくるふ主家のあろしふしさうも思ひ志がうく考へ
そきて彼者の先祖忠三のんよりて今はれさもあれへしなく
我さうづうし掃除せんとハ為くもど患ひあるべうを其の
縁ぐ此山に我旧山なり志うるふうまきみしく行てあるが花
布んじまうめとのあつく此帝助が墓を掃除なし寄り花
の供養をなし志おきく来く此山とわづ旧山なりて論とぶし
きもハ我先代の墓ありてこゝにきう雑とくずなく年へん
うハ万一其君の法事ほうふく帝助がる主家ののの
と失せんことの本意あつく其の掃除せうものを頼うせし
そのなうんよりたつくも我さし旨りて掃除なしつゝのあへすし
業りうなりしゆ我病なんと坊地をときて里人を促せはんうる
てままを是として叢草を刈除なしうまでものさんゝもなりし
とかり忠孝人田夫野人なりとも主家を助けんの一心こそ天道ハ
土壤になるといでもろる不忠義をわらうせり況んや佛の御
誓ひ会ずるふ至利益なうしうんやも御ぐべし寄るむべし

○因に曰丹波の國風土記の古義を考ふるに波の字を用ゆる事此國山々大江の名あり郡に船井あり山路沢の理みより丹波と称せしとの事大江山といふハ丹後の界にありといふハ今の老ノ坂と大井坂と出し事もありしとぞ大井川まで有る右山やまを谷ともに大江山といひしとも見えたり

大江山ハ今はすく府の北なる府内のさかひにありて　丹波和高

今の老の坂をいふ也鬼塚とて古き塚あり此山のつゞきに遊山良峯と南へ行く西に屏風とよぶ所あり又丹後勝かる大江山いにしへ酒呑童子とあざなせし盗賊の鬼か住し山にて千丈ヶ嶽ともいふ又大江山ともいふ

大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立　小式部内侍

大江山かたぶく迄に寐の夜を明せて妻を恋ふらん　[illegible]

といふ大江山とさしてよめるなり桂より二里ばかり東の名山なり又老の坂より一里西に篠村八幡宮といふあり むかし足利尊氏は此處にて二子の體を考へ出陣のとき祈誓を掛けひしよりされば此八幡宮社檀より白旗とび出て尊氏の陣にぞ飛せし是は其の人よく考へ義なりと紀し此年號に大江山とあるハその老の坂をいふて云ふとありて西へ二里ばかりにして完者あるべし

井上忠彫